

令和3年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）

児童・思春期精神疾患の診療実態把握と連携推進のための研究

分担研究報告書

分担研究課題名：子どもの心の診療実態の把握と連携に関するカルテ調査

研究分担者：五十嵐 隆（国立成育医療研究センター）

研究要旨

目的：児童青年期における精神疾患の診療実態を調べることを目的とする。

対象と方法：児童思春期精神疾患や発達障害などの診療を行っている診療科に対して、2015年4月1日から30日までの1か月間に初診した20歳未満の患者のカルテ調査を依頼し、後ろ向きコホート調査として、半年ごとの受診状況などを5年間にわたって調べた。

結果：協力依頼をした100医療機関のうち44（44.0%）の医療機関の協力が得られ、1003症例の診療情報を収集した。初診時の平均年齢は11歳（±4.4歳）で、10-14歳がもっとも多い年齢層であった。男女比は6：4であった。

診断名では、F8 心理的発達の障害がもっとも多く、次いでF4 神経症性、ストレス関連障害および身体表現性障害や、F9 小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害が多かった。これら3つの疾患群で患者総数の83%に達していた。

平均治療継続期間は1.4年であり、対象者の47%が2年以上治療継続し、27%の対象者が5年以上治療継続していた。

全期間を通じて44%の対象者が少なくとも1回の実機関連携を実施していた。教育機関が46%と最も高く、ついで福祉機関が44%、他の医療機関が22%であった。

考察：本邦で初めて児童思春期の精神疾患の初診時年齢と性別、診療継続の状況、福祉機関や保健機関、教育機関との連携の状況診療実態を明らかにすることができ、児童思春期の精神疾患医療施策の改善に資する情報を得ることができた。

研究協力者

- 奥野正景（三国丘病院 三国丘こころのクリニック）
西牧謙吾（国立障害者リハビリテーション病院）
小倉加恵子（国立成育医療研究センター こころの診療部）
小枝達也（国立成育医療研究センター こころの診療部）
竹原健二（国立成育医療研究センター 政策科学研究部）
加藤承彦（国立成育医療研究センター 社会医学研究部）
青木 藍（国立成育医療研究センター 政策科学研究部）
新村美知（国立成育医療研究センター 政策科学研究部）
黒神経彦（国立成育医療研究センター こころの診療部）
岡田 俊（国立精神神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部）
飯田順三（奈良県立医科大学医学部看護学科）

A. 研究目的

児童青年期における精神疾患の診療実態を調べることを目的とする。診療実態として、初診患者の対象疾患、初診時年齢と性別、診療継続の状況、福祉機関や保健機関、教育機関との連携の状況などを明らかにする。

B. 研究方法

精神疾患の診療実態を明らかにするために、児童思春期精神疾患や発達障害などで診療を受けている子どもについて、全国の関連医療機関において後ろ向きコホート調査を行う。

調査対象の医療機関は、子どもの心の診療ネットワーク事業参加自治体（21自治体の拠点施設（29施設）と日本小児総合医療施設協議会（JACHRI）加盟施設（36施設）、全国児童青年精神科医療施設協議会会員施設（35施設）とし、各医療機関に協力を依頼した。

対象者は研究協力施設において児童思春期精神疾患や発達障害などの診療を行っている診療科に、子どもの心の医療として2015年4月1日から30日までの1か月間に初診した20歳未満の患者である。

方法は対象者の診療記録を参照して、初診の2015年4月から2020年3月までの5年間を半年ごとの計10回において、受診の有無や他機関連携の実施状況について調査した。

本調査は、国立成育医療研究センター倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号2020-252）。協力医療機関については、各自の倫理委員会に申請して承認を得た上で

実施した。各医療機関にて倫理申請できなかった医療機関については、国立成育医療研究センター倫理委員会に一括支援して承認を得た（受付番号2020-335）。

C. 研究結果

協力依頼をした100医療機関のうち44（44.0%）の医療機関の協力が得られ、1003症例の診療情報を収集した。

子どもの心の診療ネットワーク事業参加自治体拠点施設（29施設）では19施設が、日本小児総合医療施設協議会（JACHRI）加盟施設（36施設）では11施設が、全国児童青年精神科医療施設協議会会員施設（35施設）では14施設が参加した。

1) 対象者のプロフィール

対象者の年齢と性別は表1に示した。平均年齢は11歳（±4.4歳）で、10-14歳がもっとも多い年齢層であった。男女比は6:4であった。

表1 対象者の年齢分布と性別

	人数	%
対象者総数	1003	100
年齢		
0-4才	124	12%
5-9才	266	27%
10-14才	448	45%
15-19才	165	16%
不明	0	
性別		
男	616	61%

女	387	39%
不明	0	

2) 診断について

診断については WHO の ICD-10 によって分類した結果、表 2 の通りであった。F8 の心理的発達の障害がもっとも多く、次いで F4 の神経症性、ストレス関連障害および身体表現性障害や、F9 の小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害が多かった。これら 3 つの疾患群で患者総数の 83% に達していた。

表 2 対象者の疾患群

疾患群 (ICD-10)	人数	割合
F0	3	0%
F1	2	0%
F2	18	2%
F3	29	3%
F4	218	22%
F5	24	2%
F6	5	0%
F7	72	7%
F8	421	42%
F9	194	19%
その他	17	2%

副診断の有無では、有りが 602 名 (61%)、なしが 392 名 (39%)、不明が 5 名であった。副診断の内容は表 3 に示したように F8、F4、F9 が多く 3 つの合計で 75% であった。また、副診断では F7 の精神遅滞が 19% であった。

表 3 副診断の疾患群

副診断の疾患群	人数	副診断を有する対象者中の割合
---------	----	----------------

F4	101	26%
F7	73	19%
F8	105	27%
F9	85	22%
その他	30	8%
欠損	2	

身体疾患の合併では合併有りが 121 名 (12%)、合併なしが 881 名 (88%) であった。

3) 治療継続期間

2015 年 4 月から 2020 年 3 月を半年ごと 10 期間に区切って、各期間における受診・連携状況などを尋ねた。

対象者のうち、調査期間内に治療中断している対象者の平均治療継続期間は 1.4 年であり、対象者の 47% が 2 年以上治療継続し (最終診察日が初診日の 2 年以降)、27% の対象者が 5 年以上治療継続していた (すなわち 2020 年 3 月末時点で治療継続中)。

各期間における治療継続者の割合 (最終診察日が各期間の開始日以後) は表 4 の通りである。

表 4 治療継続者の経年的割合

	平均	SD		
継続期間 (年)	1.4	1.5		
	継続	中断	欠損	割合
2 年以上継続率	464	531	8	47%
5 年以上継続率	271	732	0	27%

期間 X に おける治 療継続率				
期間 1	1003	0	100%	
期間 2	688	311	4	69%
期間 3	586	413	4	59%
期間 4	530	469	4	53%
期間 5	475	524	4	48%
期間 6	443	556	4	44%
期間 7	409	590	4	41%
期間 8	384	615	4	38%
期間 9	343	656	4	34%
期間 10	314	685	4	31%

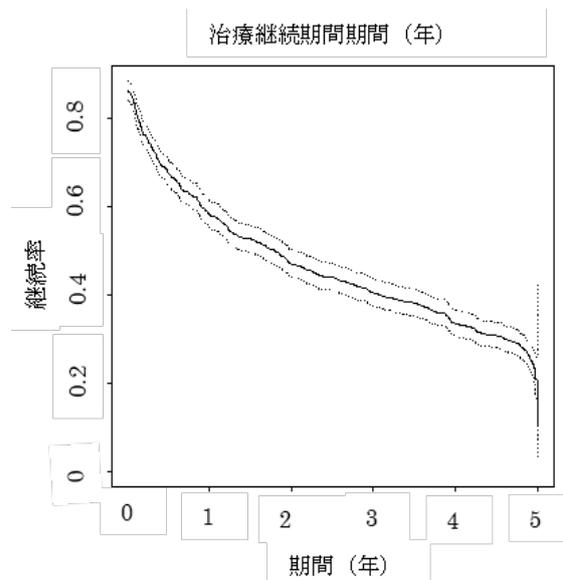
治療継続期間を疾患別に初診時の患者数の割合で見ると表 5 に示したようになる。F8 や F7、F9 では 2 年以上治療継続となる割合が高かった。

表 5 治療継続となった初診患者数における疾患群別の割合

疾患群 (ICD-10)	2 年以上	5 年以上
F0	100.0%	100.0%
F1	0.0%	0.0%
F2	44.4%	27.8%
F3	44.8%	10.3%
F4	31.7%	13.3%
F5	37.5%	29.1%
F6	20.0%	0.0%
F7	54.2%	27.8%
F8	54.4%	34.8%
F9	46.4%	29.4%
その他	17.6%	6.0%

図 1 に表 4 を基に診察終了までの期間をグラフに示した

図 1 治療継続期間(破線：90%信頼区間)



4) 診察頻度

対象者 1003 人が診察を受けた 1 期間(半年)の合計は 4553 であった。そのうち、21%では期間中に 1 回の外来診察があり、21%では 2 回、15%では 3 回の外来診察があった。約 9 割の期間で、期間内の診察は 6 回以内であった (平均月 1 回以下)。

表 6 期間内 (半年) の診察回数

期間内の診察回数	診察回数 × 人数	%
1	972	21%
2	978	21%
3	691	15%
4	438	10%
5	429	9%
6 (月に 1 回)	454	10%

7～12 (平均月に1回超)	481	11%
13～24 (平均2週に1回超)	99	2%
25以上 (平均毎週超)	11	1%

4) 他機関との連携

全期間を通じて44%の対象者が少なくとも1回の他機関連携を実施していた。各期間で診療継続している対象者における他機関連携実施率は表7の通りである。

表7 連携の概要

連係実施率	連係あり	連係なし	欠損	割合
全期間	443	560	0	44%
期間1	333	666	4	33%
期間2	129	470	89	22%
期間3	105	400	81	21%
期間4	86	342	102	20%
期間5	86	307	82	22%
期間6	80	277	86	22%
期間7	74	276	59	21%
期間8	75	247	62	23%
期間9	52	256	35	17%
期間10	58	221	35	21%

初診後1年以降は20%前後で経過しており、他機関連携実施率の継時的な大きな低下はなかった。

全対象者のうち、初診後2年以内に少なくとも1回の連携を行った割合は40%であり、初診後2年以上診療を継続している対

象者(475人)の中で初診後2年以降に他機関連携を少なくとも1回行った割合は37%(177人)であった。

5) 連携先機関

全対象者の全対象期間のうちで、連携機会(連携があったと報告されている期間)は893であった。他機関連携の各連携先カテゴリが全連携機会(1084回)において連携される割合は、教育機関が46%と最も高く、ついで福祉機関が44%、他の医療機関が22%であった(表8)。全連携機会(1084回)のうち、24%が複数機関と連携していた。

表8 連携先の頻度

連携先	あり	なし	欠損	割合
教育機関	502	582	0	46%
福祉機関	472	612	0	44%
保健機関	55	1029	0	5%
他の医療機関	241	843	0	22%
司法	14	1070	0	1%
その他	65	1019	0	6%

初診後2年後以降における複数機関連携は他機関連携の25%前後であり、時間経過とともに大きな減衰は認めなかった(表9)。

なお、医療機関によっては初診時に教育機関からの情報提供を必須としているところもあった(対照施設から研究事務局へのメールによる情報提供)。

表9 複数機関と連携した割合

複数機関と連携した割合	あり	なし	欠損	割合
-------------	----	----	----	----

	797	254	33	76%
	N	%		
1 機関と連携	797	76%		
2 機関と連携	180	17%		
3 機関以上と 連携	74	7%		
欠損	33			

対象者全体における連携先のパターンは表 10 のとおりである。教育機関のみが 31% と最も多く、ついで福祉機関のみが 29%、医療機関のみ 15% であった。複数連携カテゴリにまたがる連携としては、教育+福祉、教育+医療、福祉+医療などが多かった。その他のパターンの複数連携はそれぞれ全体の 1% 以下であった。

表 10 連携先のパターン

パターン	連携機会	割合
総連携機会	1084	
教育機関のみ	331	31%
福祉機関のみ	315	29%
医療機関のみ	164	15%
教育機関+福祉機関	85	8%
教育機関+医療機関	31	3%
福祉機関+医療機関	19	2%
保健機関のみ	18	2%
その他 1 機関	38	4%
その他複数機関	83	8%

6) 入院となった症例について

95 例 (10%) で調査期間内に入院があった (表 11)。入院回数は 71% が 1 回であった。

表 11 入院の有無と回数

入院	あり	なし	%
	95	908	9%
入院回数	N	%	
1	67	71%	
2	19	20%	
3	4	4%	
4	4	4%	
5	1	1%	

入院率は期間 1 で最も高く 6% であったが、初診後 2 年以降も 2-4% の入院があった (表 12)。

表 12 期間別の入院

各期間 の入院	あり	なし	欠損	%
1	64	932	7	6%
2	22	572	89	4%
3	19	479	83	4%
4	15	408	100	4%
5	12	377	78	3%
6	13	338	83	4%
7	10	336	54	3%
8	6	312	55	2%
9	6	298	26	2%
10	5	268	6	2%

入院となった疾患群では初診時患者数の割合で見ると表 13 に示したように F2 がもっとも高く、F5、F3 と続いていた。

表 13 入院となった疾患群の初診患者数における割合

疾患群 (ICD-10)	人数と割合

F2	14	77.8%
F3	10	34.5%
F4	20	9.0%
F5	10	41.7%
F6	1	20.0%
F7	1	1.0%
F8	25	6.0%
F9	14	7.0%

小児特定疾患カウンセ リング料	49	1982	2%
心身医学療法	1	2030	0%
診療情報提供料	47	1984	2%
その他	450	1581	22%

7) 診療報酬について

調査期間内に診療報酬改定があったため、2017年4月以降についてまとめた。全対象者の2017年4月1日以降の期間で、診察があったのは2031であった。算定された各診療報酬の割合は以下の通りである。初診はほとんど算定されていなかった。通院在宅精神療法5分以上が約8割の期間で算定されていた。

表 14 診療報酬

	あり	なし	割合
初診料	93	1938	5%
通院・在宅精神療法 (5分以上)	1580	451	78%
通院・在宅精神療法 (30分以上)	364	1667	18%
通院・在宅精神療法 (初診時、60分以上)	19	2012	1%
通院・在宅精神療法加 算(20歳未満)	275	1756	14%
児童思春期精神科専門 管理加算(16歳未満)	148	1883	7%
児童思春期精神科専門 管理加算(20歳未満)	35	1996	2%

D. 考察

今回の調査によって、児童期・思春期の精神疾患の診療実態として、初診時の平均年齢が11歳(±4.4歳)、男性:女性が6:4、疾患群としてはF8がもっとも多く、続くF4、F9を合わせると患者総数の83%に達していることが明らかとなった。

さらに診療の継続期間も対象者の47%が2年以上継続し、5年を経過しても27%の対象者が治療継続となっていた。こうした診療の実態が調査によって明らかとなるのは、本邦初のことである。

また、関連機関との連携においても調査機関を通じて、連携を必要としていた割合は44%であり、医療機関単独で治療が行われているのではなく、教育機関、福祉機関、保健機関など単独あるいは複数の関係機関と連携を取りながら診療を継続していることが明らかとなった。

診療報酬では、通院・在宅精神療法を取得している医療機関が主であったが、多くは30分未満であり、外来診療に多くの時間を当てることができていない実態も明らかとなった。また、小児特定疾患カウンセリング料を取得している割合が低く、今回の調査には小児科の参加が少ないことがうかがわれた。昨年度の本研究課題において調査した精神科での初診時年齢が11歳であり、小児科の初診時年齢が7.9歳であることから、今回の調査では多くが精神科における

診療実態を反映していると推定された。

E. 結論

後ろ向きコホート調査により、児童期・思春期の精神疾患の概要を明らかにすることができた。とくに診療機関が2年を超ええ長きにわたっていること、他の関係機関と連携しながら医療を継続していることが明らかとなった。

F. 健康危険情報

とくになし

G. 研究発表

とくになし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定含む）

- 1、特許取得 なし
- 2、実用新案登録 なし
- 3、その他 なし

別紙 1

協力医療機関の一覧

(50 音順・敬称略・2021 年調査時点)

【施設名】

愛知県医療療育総合センター中央病院 児童精神科
愛知県医療療育総合センター中央病院 小児神経内科
石川県立高松病院
茨城県立こども病院
大阪市立総合医療センター
大阪精神医療センター
大阪母子医療センター
大村共立病院
岡山県精神科医療センター
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
神奈川県立こども医療センター
九州大学病院
高知大学医学部附属病院
国立国際医療研究センター国府台病院
国立成育医療研究センター
駒木野病院
埼玉県立精神医療センター
四国こどもとおとなの医療センター児童心療内科/児童心療精神科
四国こどもとおとなの医療センター児童精神科
自治医科大学
自治医科大学とちぎ子ども医療センター
島根県立こころの医療センター
信州大学医学部附属病院
総合病院 国保旭中央病院
千葉県こども病院
千葉大学医学部附属病院
天竜病院
東京大学医学部附属病院
東北大学病院
東北福祉大学せんだんホスピタル
鳥取大学医学部附属病院
長野県立こころの医療センター駒ヶ根
阪南病院
肥前精神医療センター
兵庫県立こども病院
兵庫県立ひょうごこころの医療センター
北海道大学病院
松田病院
宮崎東病院
山形県立こころの医療センター
山梨県子育て支援局 こころの発達総合支援センター
山梨県立あけぼの医療福祉センター
山梨県立北病院
琉球病院

【代表者名】

吉川 徹
丸山 幸一
北村 立
須磨崎 亮
松本 慶太
花房 昌美
前川 加奈美
宮田 雄吾
大重 耕三
松岡 剛司
新井 卓
山下 洋
高橋 秀俊
稲崎 久美
黒神 経彦
笠原 麻里
長尾 眞理子
牛田 美幸
中土井 芳弘
村松 一洋
阿部 隆明
小林 孝文
本田 秀夫
磯野 友厚
安藤 咲穂
佐々木 剛
山村 淳一
金生 由紀子
植松 有里佳
富田 順子
前垣 義弘
原田 謙
横田 伸吾
瀬口 康昌
玉岡 文子
田中 究
齊藤 卓弥
松田 文雄
赤松 馨
神田 秀人
出口 恵子
青柳 閣郎
長谷部 真歩
原田 聰志